

2020年4月12日 復活日礼拝メッセージ「すべての命を大切にする」

牛田匡牧師

マタイによる福音書 28章1-10節

イースターおめでとうございます。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大によって、大阪府にも「緊急事態宣言」が発令され、外出の自粛や仕事の休業が要請される事態になっています。八尾市ではこども園や保育園も休園となっています。このイースター礼拝を、皆で集まって礼拝することが出来ないのは残念なことです。今はそれぞれの人が外出を自粛することが、自分だけではなく周囲の方々、地域の方々の命を守る事につながるということを思い、ジッと耐え忍ぶ時なのだろうと思っています。

私たちは大きな困難に出会った時、しばしば「明けない夜はない」という言葉を耳にします。確かにどんなに長い夜であっても、明けない夜はない。いつ夜が明けるのかは明確には分からないとしても、いつかは必ず夜明けが来る……。そう信じる事で、困難な現実の中にあっても、絶望に飲み込まれてしまうのではなく、「今を生きる力」が生まれてくる事が確かにあります。しかし、私たちが長い暗い絶望のトンネルを通り抜けて、夜明けを迎えた時、そこに広がる世界は、トンネルに入る前の、夜になる前にあったのと同じ世界なのではないでしょうか。恐らく、そこにあるのは異なっている世界、似て非なる世界なのではないでしょう。

1995年の阪神淡路大震災の時も、2011年の東日本大震災や福島第一原発事故の時も、何千人もの命が失われ、何万人もの方々が被災されるという大きな悲しみ、絶望を経験し、今までの自分たちの生き方を見直させられて来ました。「この世で本当に価値のあるものは何か」、「カネやモノという目に見える豊かさを追求して来た20世紀の生き方はどこか間違っていたのではないか」、「人間として『いのち』として、一番大切にすべきものは何なのか」……。そのような問いを多くの方々が抱いていたように思います。

東日本大震災の後、東北地方の「復興・復旧」が叫ばれる中、「震災以前の社会、価値観に『復旧』して戻るのではない。新しい社会、生き方へと『新生』していくんだ」と訴えていた方々がいたことを思い出します。しかし、その後の9年間の世論の流れは、残念ながらそのような訴えに耳を貸さずに来ていますが、全く同じことが今、新型コロナウイルスという新たな脅威の下、全世界中で同時に起こっているのでは

ないでしょうか。

聖書の中には、「火という試練によって人やモノは精錬される」「メッキがはがされて真偽がハッキリさせられる」ということが、しばしば書かれています（コリントー 3：12-13、ペトロ一 1：7）。それは火災の後に焼け残った物や、鉄や金銀を鉱石から精錬する工程を目にしていた古代の人たちの素朴な思いだったのでしょう。今、この新型コロナウイルスという火に見舞われた世界は、これから精錬されていき、これまで「価値あり」と思っていたことの数々が、精錬の坩堝を経て、金と思っていたのにメッキがはがされて燃え尽きたり、逆に価値のない単なる石と思っていた石の中から金が出て来たりしていくのではないかと思っています。

思えば、このイースターの出来事もまた、そのように人々の価値観や生き方をひっくり返した火の試練、坩堝の出来事でした。強大な暴力によるローマ帝国の支配、また不浄と清浄、呪いと祝福を独占していたユダヤ教の宗教指導者たちに対して、反旗を翻し、搾取されていた民衆たちを扇動し、クーデターを企てた指導者たちが、イエス様と同時代に何人もいたことは歴史学的にも明らかになっています。しかし、それらの指導者たちや革命軍たちは、全て圧倒的なローマ帝国の武力の下に鎮圧され、十字架刑に処せられました。日本で言えば、いわゆる「さらし首」と同じです。ガリラヤの町の丘に何本もの十字架が並べられたとの歴史書の記録も残されています。

イエス様に従った弟子たちも、そのようなローマ帝国の武力を知りつつも、今度のイエス様こそ、あわよくば搾取され続けて来た自分たちを解放してくださる救い主メシアであると信じて付き従って来ていました（「熱心党のシモン」の熱心党とは、そのような革命派の人々）。しかし、イエス様はあっけなく逮捕され、あっという間に最高法院で審判され、ローマ兵によって十字架に架けられて、殺されてしまいました。

あの裁判からして不当な裁判であり、抗議することも出来たのに、何故抗議しなかったのか。何故、一切の抵抗をすることもなく十字架につけられ、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ（わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか）」という情けない絶望の言葉を遺して、死んでいったのか。弟子たちにしてみると、理解できないことばかりでしたが、そういう弟子たちは皆、イエス様を見捨てて逃げ出してしまいました。

さて、今日の聖書の箇所ですが、『マタイによる福音書』28章1節で

す。「さて、安息日が終わって、週の初めの日の明け方に、マグダラのマリアともう一人のマリアが、墓を見に行った」とあります。こう読むと二人は明け方、夜が白み始めた頃に、早起きしてお墓に出かけたかと思いますが、原文では「安息日の夕方、週の第一日目が始まろうとしている時に」です。ユダヤ教の日の数え方では、日没で日付が変わるので、素直に読むと、「陽が沈んで安息日が終わったので、すぐさまお墓に出かけた」のだと分かります。外灯も無い時代に、二人の女性だけで夜中に出掛けて行くなんて非常識、不用心だ、ということで、従来は「明け方に」と翻訳されて来ましたが、原文通りに「安息日が終わって、夜になったのですぐさま」という方が、二人の必死さが伝わって来ます。

それこそ常識的に考えれば、死んでしまった遺体をお墓に訪ねるわけですから、せめて夜が明けるのを待ってから出掛ければよいわけです。なぜその数時間すら待てなかったのか。自分たちが夜中にお墓に行く途中で山賊に襲われるかもしれないという危険を冒してまで、なぜ急いで行ったのか。そこにはこの二人のマリアの哀しみというよりも、イエス様に対する後ろめたさ、罪意識があったのではないかと思います。とりわけ「もう一人のマリア」と記されている「イエス様の母マリア」にしてみると、聖霊によって与えられ、自分のお腹を痛めた我が子を助けられなかったという悔恨の思いがあったのではなかったでしょうか。

二人のマリアがお墓に着くと、地震が起こり、稲妻や雪のように白く輝く天使に会いました。実際にはどのような姿だったのかは分かりませんが、夜の闇の中でひときわ目立つ白い姿だったのでしょう。天使は女性たちに言いました。「恐れることはない。十字架につけられたイエスを捜しているのだろうが、あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活なさったのだ」(28:5-6)。この「復活なさったのだ」は、日本語の敬語表現になっているので、イエス様が自分の力で予告していた通りに「復活した」かのように読めますが、原文では「(神によって)起こされた」という受け身の表現です。

続けて天使は女性たちに伝えました。「急いで行って弟子たちにこう告げなさい。『あの方は死者の中から復活された。そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる』」(28:7)。その言葉を聞いた、女性たちは、恐れながらも大喜びで、急いで墓を立ち去り、他の弟子たちに知らせるために、夜の道を走って戻って行きました。その心の中は来た時とは全く正反対になっていたのではないかと想像します。初めは、二人の心の中は「イエス様を見殺しにしてしまっ

た」という、自分たちの出来なかったこと、やらなかったこと、失敗と後悔の念でいっぱいでした。しかし、神はそのイエス様をそのままには捨て置かれなかった。イエス様を死の中から引き起こされた。そして「先にガリラヤに行く」とおっしゃっている。自分たちにももう一度イエス様とやり直せるチャンスがある……。「死」という絶対的な断絶を前にして、諦め、絶望していた二人、自暴自棄にさえなっていたかもしれない二人にとって、その死すらも乗り越えられた、再びイエス様と会えるだろうという天使の知らせは、一旦は完全に消えた灯に再び火を灯すような、喜びと希望の知らせだったに違いありません。

他の弟子たちが待つエルサレムの町に向かって走って帰る二人の前に、今度はイエス様が立っていて、「おはよう」と言われました。聖書協会共同訳や新共同訳では「明け方」だから「おはよう」と訳されていますが、ギリシャ語としては時間帯に限定されない挨拶の言葉です。聖書の他の箇所では、「喜びなさい」「ご機嫌よう」などと訳されていますが、原意としては「心の中が晴れやか（スッキリ）であるように」という意味だそうです。聖書の中に何度も登場する「恐れることはない」という言葉と共に、恐怖や後悔、罪責感、後ろめたさなどから解放されて、心中穏やかであるように、という事でしょう。

イエス様は言われました。「恐れることはない。行って、きょうだいたちにガリラヤへ行くように告げなさい。そこで私に会えるだろう」(28:10)。ガリラヤ……。そこはイエス様が生まれ育ち、活動された地であり、かつ女性たちにとっても、他の弟子たちにとっても、イエス様と出会った地でもありました。預言者イザヤの時代から「異邦人のガリラヤ」(イザヤ8:23)と呼ばれ、「抑圧された地」であり、「闇の中に住む民」「死の地、死の陰に住む人々」(マタイ4:16)の土地と呼ばれていた場所でした。今、最も弱く小さくされている人々、しんどい思いをしている人々の所にイエス様は生まれた、そして「死」すら越えて今も共に生きておられる……。女性たちがお墓で出会った天使は言いました。「イエス様は、今、ここにはおられません。ガリラヤ、即ち、今一番しんどい思いをしている人の所へ行っています」。また女性たちを待ち受けていたイエス様も言われました。「そこで私に会えるだろう」……。復活されたイエス様は、今一番しんどい思いをしている人の所に、共におられます。

イエス様の復活、死からの引き起こしは、十字架での処刑以前の状態に戻るという単なる「やり直し」「復旧」ではありませんでした。イエ

イエス様の言動の真意を理解せず、有事の際には一目散に逃げて行った程に頼りなかった弟子たちは、この後、全く異なった歩みを起こして行きました。歴史的に見ても、「ローマ帝国による暴力支配に対するクーデターを起こし、失敗して指導者が処刑された後、生き残った人々は諦めずに再び革命軍を結成して、もう一度クーデターを起こし、ついに帝国支配を打ち倒した」というわけではありませんでした。弟子たちは単なる「復旧」「やり直し」ではない、第三の道、新しい生き方へと導かれ、歩みを起こされて行きました。イエス様の復活から約 2000 年を経た現代を生かされている私たちもまた、今、この新型コロナウイルスのパンデミック（全世界的流行）の困難の中にあって、復活のイエス様と共に新しく生き直す道、新しい命、死を超える「永遠の命」へと招かれているように思います。

今、世界は「すべての命を大切にする」歩みをしているかどうか、改めて命の創造主である神様から問われているような気がしてなりません。これまでの局所的な災害とは異なり、全世界中で同時多発的に蔓延する目に見えないウイルス……。その困難に対して、「明けない夜はない。私たちはこれまでもいくつもの試練を乗り越えて来た。私たちに出来ないことはない。自分たちの力を信じて、団結して頑張っ乗り越えよう」という頑張り方をしても、ウイルスには勝てないでしょう。困難以前の姿へと戻ることを目指すのではなく、復活のイエス様が示されたように、この垣塙を経て、全てが溶かされてから再構築されるもの、本当に価値のあるもの、死を超える命、それらを求めて行きたいと思いません。

毎日のように感染の拡大が報じられ、東京都や大阪府などの自治体の対応も、日に日に変化して来ています。私たちの身の周りにも、ウイルスの被害が迫って来るのも、時間の問題かもしれません。「死を超える命」「本当に大切なこと」とは何か。イエス様の復活を覚えるこのイースターに、私たちは改めて「すべての命を大切にする」歩みへと、イエス様によって新たに導かれて行きます。